俳諧初学抄　全

へ 5
1853

柳居　松籟菴　長水
宗瑞　出羽堂　常仙
馬光　墨嵐亭　素丸
陳琳　竹亀　連之
寥和　碩天床　碩尺

誹諧初学抄

誹諧式目の事家々集ハいまた定めし作法
されハ法式目世間ニ有とは云てかんかうとハ人々も
なく又これを作者擢をさして作し無きる作を自己
是ハたゝしかへしの人の邪與ニいふハ地義の
かしらに蕪をかこハ打越を嫌ふへし式ハ花
ミちのみ春く夏しくかならす利口ニ云作
て畢竟式目をしらぬとみへたり古来より国によ
まれるハ和漢の法度ニひとしく誹諧分於は
連歌ニ俗語をまして前句の詞をあらぬ形ニとる
なりして付合をさるかりし然ハ誹諧ニハ連歌の徳

此部に至りてハ書まりなれてなりしに作りよき事一倍
後と見る事二ハ自讃(ジサン)し句てもおかしき事定
三ヶ月の風景(ケイ)をもよほしける事多し初心の者ハ
字ひ安くして和哥の浦波にいかを作る事有
又ハ集哥古き事來歴(年)に得たる事もすこし一句を具
をかし作りハ作る事をもひろく引よせて付侍る
へき事是又此ごとく花新式に書出し和漢
法度此隙し
一景物(ケイブツ)草木ともに連哥日本にあるへし
一春風秋風木二の物ハ秋をくてハよくなし
一同季ハ連哥のごとく七句去へし然共七句去物ハ古ゝと

一連哥のごとく発句て嫌物の事
日字神祇釈教述懐恋猿なり
一五句の物三句嫌へとハ木と木草と草山類水辺
居所衣裳句鳥と鳥虫と虫獣と獣の
ごとく
一三句の物二句きらへとハ其外にひきまと草
其の外数ハ弾物之組合に其外にもそれのことく合ふり
之村合けに木連哥にハ五句く桃源にハ三句嫌
なりし
一二句の物ハ文字を嫌ひ作るたくいハ連
哥のごとくなるへし

一　一座一句の物　鶯　郭公ハすゝしすゝみも二て出之候
同季ニハ当句隔ニ拘り遠く嫌ふへし　和と漢ニ
二句り
一　竜虎狼ハ連歌にハ千句にも一と切り　和漢
ニハ百韻の内ニても出る面ハ句の内ニも不苦千句
折りハ二ツもうたうてつく　折をくゞて和と漢ニ行へし
但あられけやけきち　物ハ一座一句たるへし
右和漢の篇乃法く
一　当世ハさらとして同季拘ず句去ニ定ム文
同季神祇釈教述懐恋猿去拘ニ句去ト
さてすもたり又田舎をうへにも非俳諧なり

気味よしなと云て連歌のたとく法度ある
たる是又ことなる事ハ相志及ハさる事ハ嫌ひし何にも
いされす當座ニ定れる和漢の法ニ背へき
へきを強ハ懐紙つもりも不苦し　此二ヶ條ハ右の法
度のことくて嫌物あり　但ニ三座ニもするへし　當座
の会ニ致又ハ貴人こゝろへ略ス流句より法ノ鋪存の
折ゝハ同格たるへし　萬一の此法度つよく御法
侍し備れハ句も先へ不行ゆへて無拠侍れハ之を
此度ニすりて之内法すへし　是ハ切者の連歌
ニて又歳をたて独筆をそらへて百韻を興
行出て此の事かるへし

一 新式にかゝはらすとかくたゝしひハせう古なるへし
一 おもて八句の内に神祇釈教天象恋無常出へからす
連歌にハ十句めまて嫌ふへし
一 下九句のはしめてよめハ千句に一とおり誹諧にハ
いくつもてかるく
一 誹諧不審とハ中〻しく作意ある所を定めても句ハ出来
たとへハ古言へ出座れハやてハ是非をもかまハれぬ
らせられぬかほこなき日作表あへしと庭をとらへ
かれぬ人ハ各る句ハ不可なさすたに誹諧も
和歌の一躰なれ共過分なるれならハ作の者也られ
一 恋ハ句に至りて座の人〻もてなしてハ句ハ出来ます
みし残に別してこまか作者へし新古篇中より
へ懐紙を出してよしにくきひろう事ある句ハ其
改てかくしおく
物にたとへハ連歌ハ能誹諧ハ狂言なるへしいふに狂言
なりとはいふとも当世さやあかつきれ座の狂言なと
ハおかれぬにあそけさひをよく〻直なる
する事なく
誹諧も一句の仕立やうに多分上にて多くと
下へかゝし下のか文字をとへかけよくにつゝき
りけるハわかのつゝきもよし後悔もなきへか
らすたとへハ白山忠信と云名を門文字にて

山畠西鶴と号し侍るハ秀下にわたりて侍るく
又一日ハ千句作をも常に沙汰し一夜千句
らハ五ひろしるてをいうハ矢数百韻の中へ入
うけたまはれ候も十句もましまさねハ枚をしら
ろうきねく
太平百年以来の名有人の名を当世出来さ
発句ハ此国但豊国東山の大仏三条地
橋跡の為六条の門跡けれハあま孫く天下に
流布し侍れハ不苦候准え
一宗祇ハ角田川ニ書れたり寿ハ十歳を以
ハ三歳にして読ありつ連歌ハ四句迄と以て十歳

に生とるゝや誹諧ハ一体と以へども二体あり
一つハ心の誹諧二つにハ詞の誹諧いづれも心の誹諧を
ハ一段おもしろくあらためられ詞の誹諧をへまへにせられ
なりとみへたり心の誹諧と云ハ句がらもよく
て心に奥をもちてめりはりをそふれといふといへハ
秀句にかゝり利口を詮にいひ立面白くまれハ
かゝる秀句利口をもし仕立てよろしく候へハ細工
下にをきて是非文字をかへをかへて候への初心の
まなしもゝ一句二句ハ仕かへつるゆへこそ人の
会合して出座に及び面白するゆへ付句に至て
ハ一句もぬてうして無面目になれ心とも見え

何すかたに付候句自古風見えては
及ばしけり候をよみ出すにいかしくの入まれなり
今の誹諧は心をいれ候ゆゑ発句も又古之
されば昔の上手の誹諧に

寂莫と夢てさめて帰る　仙令

白檀は花のつぼみの花　宗長

山の端に白皿ほどの月出かし　宗祇

又旅紹巴法眼連歌に両吟にしたゝの菓子出ければ

いむ竹のたけし[illegible]　雪舟

柿本の人まろにする夜むし　紹巴

折残る枝の梅しぬけく　昌叱

又誹諧に名残あし　山崎の宗鑑　伊勢の守武

発句

海見にもでゝもかすみ春日かな　宗鑑

風けづる柳や岸の額ぬらん　守武

あしたの爪にもうすりる萱ぶ　同

去の夜は明れて行ぬますや　同

梅かほや去年の家の庭　同

月に見残さしたるはよき国や　宗鑑

花柴のうそもしれぬは秋の月　守武

ちに持はその深の村もみち　宗鑑

声かゝはくゞる雲の一つく　同

茶の水に秋をやすむ氷かな　守武

一　たける御とみてん得にあらし
はやさしみさして分別け位と云事なりけれとく
ハ悪カハ四季共に立物と云脈ハ春秋立物くカなりに
これあつまりかててはいはいやしけれ初と云る
を秋にかりんと云又一方にハみるにかり候らん
とは作くる事へは脈四季の事候に付く外を
同にみるるへしとかられうるの故ハ初め
茶とハ炉を閉てたて出候れハ冬に候ぞす
へきよしやさればは冬の時のくるむくと同
心し侍り他准らし

一　連歌の誹諧付として二筋有りたとへハ此のかと
云ハ日月又ハ嵐車かと付るハ連哥なり又誹
諧にハ十二三郎八ていは候ぞる候へかと付る
同前とや月ニ毎馬頭車かとハ星の宮連哥也
是をめづらしかす誹諧ハ見きぬ纏の障
みけるみハかかろうか付べし　保連連歌に
付るる詞を立候ることに心ハ外のをと面白
おかしくとのしたらハ狂の体そたるべし

一　誹諧の日付に初心忠心諸心と云ハおなた
とへハ馬と云る時基子と付基をおもと云に大名
をりしてぬすべしと云連付すのこちきると云

句にもちけるの付合ハ前かく無につけ出し
所あれ侍り初一座にてハ馬に羽甚合
を作ら人とおもひよるとも是ハ疎しき付様
もてなくと初の四を打捨市を立為新の文
ハ新言句し能く据ハふめつしきをとどめ
ぬすれ指合の作し八連無付にいうて出来
情の星か去嫌ふかと作べし是も指合作らハ
立入りて古作の付こころみても作へし疎ず
壁とおもひたる先も弄着の一新ハ論もなき
ずて

一前句にもれたる付る先にて用付ても句心にたとへハ

翁をたつとき御夢に見まへ
枕より熱く来ひろみ比涙敷て
まくひろうりいか翁ハよみ出
とこりの言ふかれたりけり
新なときけと句ハたう強にて

是又ときもふ日ハよくい昔年のたとへ言と九卩は
人の思ふ月の景様をさしこむやうに付きた
いかん侍る

一祈付そうるし付四季とて三つの示かりたい付
とやハ前句の心を入らしてその趣を能いひ
句尾をこり是非の句作付あり人次にそうなし

付と云ハ前句の詞をあしらふ事にはなれし付く
是ハ作意ニ付又心付と云ハ式ハ漢古るの式ハ詩
歌物語やうの風情ある句をよく付んたくへハ

身のほどハたゝこぼれけり

まめなる人の之に忘られぬ

ないがい付く

たゝみなれし紫のいかゞせん

かくれさむへ出家ゐるころ

なぞらへ付く

春日の里に狩りしてまて

ぬきゝせむ紫のすりの袖

此句ハ心付くな付合ともよくも作者もその外に句
にはなれしき物めなり
一 句に二句も三句も其うつれにあとをひくなる
かく式ハ古今の經文をふみ付にてハ源氏伊勢物語
とふて付所又詞をとるなどとして付くべき第一に付
付合も有るが此ハとうしさま出作しぬる身のの
句に落書（ちよ）本字は縁語もなるよし忘れぬを
にハ能く続へし其のよハ連歌も誹諧も同
ならはるへし
一 誹諧にすきもの好く人に志られたらん
誹の人ハ二句を附る發句を一二ハつ縁になかち

さてたしかなる人ハ此宗をかたくおもふ久
支あるし作もん芸しみいかなる紀氏たり
と云先師宗匠には此句あらぬやうなきことハ半
を居ふあつて栄載句の流ふ作之入
仰てもめつらしきを行くハ宗匠判ゆのる
と弟へし 挂移もまさりでもんて作るゆふを
てもんとしけよとふ事もし

一 連歌之の俳諧とハ此連之の俳諧といふ事 連
歌之の俳諧ハ今の俳諧尋常にして誹諧たる
しくてにもかし 俳諧之のことハ誹諧なり
わかつるしてる作り かつてうへし此道をたゞ

一 かまへておもつて俳諧を当代にかしして連歌
にもとらざる様ふ小学大学ふあらん
かるへし

一 百韻とも挂合ともいふ 真の時ハ俳諧五職
物をとらずしてよくたとへハ連歌ふハ初と云字
をも初屋初百初なとしてきりを俳諧ふは
節物名物又初男初女物なとしてなくし 古今
以下小職ふ作しも可准之する此時一字
歌二字返音二字中略四字上下略とも
ろへし 是ハ連歌と同なるへし

一 夢想の此脇ハとるへすかり利益の俳諧と

五字書へしされハ四季恋ハ都て九句く
上の句の叶ハ常のことく八句く連ぬるなく
一 歌仙の懸紙とあるハ二折ニ三十六句あ
ニ六句うくに十二句又二の折ハ都て廿十二句
又ヿ六句く月花の定座ハ今へしされ
も雑也ハなし 歌仙の懸紙とせつし
四季ハ詞并恋の詞

初春

正月元日 元三 年月日 ハ三ハなしめといふなるへし

一 四方拝 人王五十九代宇多帝仁和五年正月一日

天子寅ノ刻ニ清涼殿東ノ庭ニて天地四方を拝
し給ふ事也

一 屠蘇白散 同元日く 五十二代嵯峨天皇弘仁年
中ニ始て行く 曲薬ハうしろ奉れ 薬く

一 薬子 元正ニ天子ニ右ハ薬を供奉する女をいふ

一 朝賀 是も元正ニ孝徳天皇大化二年ニ始て行
不嫁因く
人 去年ハ目出度事と慶聞やまうしたる

一 小朝拝 元日く醍醐天皇延喜五年ニ始て行
く臣下たくし御門と年ハ始ニ拝し奉るとて
ため出活と申さしなる拝し奉る事く

一 内侍所にて仏名元正定多法門定年々中
に始て行事
吉書 書初にハ筆こゝろむると作り
そのため嘉国と書之 倶に屠蘇飲むには
生しずに作れ 又縫たぐしと云説行はされ
す元正に蘇初て目出度たまし 作れハ之をかり
に倒ても飲むの時ハ是を用ゆ たとへハ之を
八日事ともに祝ひ初れども涼しきために夜を
家とし作れハ天子に注定せり 祝て濡く
其元のすむかな 年徳 元方 門 神棚 鏡の餅
一 掛鯛 志だ ゆづりは かざりなわ かざりかちぐり

一 蜆の盃 〆し肴(サカナ) 太くて焼 くしがき 葛 水餅
一 三物進る すゝきえ
一 元日節会 七代仁徳天皇治世六十二年に始る
玉子 たまかり もとゆい たま祝ひ 弓矢
ぎっちゃう
一 縄(ツナヒキ)年玉 ひめもちしめ 飾りして
一 二宮大饗(ニクワウタイキヤウ) 正月二日 五十三代淳和天皇天長七年に始行之
一 朝覲(テウキン)行幸 正月二日 嵯峨天皇大同四年始て行之
一 臨時(リンジ)客(キヤク) 正月二日 公家代々大臣家にて於奥座して大臣饗(カン)上
肆(リツチ)部を招て於奥座之
千秋(ス)万歳(ニサ) 宗旨 貢物 貢物 謡初 松囃子
きくゆへ 世俗摂津 おめでた始 御宴 うた始行く

一 畳白ノ懐紙 正月三日、於小御所連歌あり

一 卯杖 正月上卯日也、持統天皇朝ニ始る、文徳天皇仁寿二年まで止、五尺三寸の杖也、天子の御料を作りて奉れ、儀式ある事也

一 御国忌 正月四日也、村上天皇母后の御国忌也、十二月上ノ卯日ニも行う事あり、年ニ二度ハ朝とあるゝしてたちしめ 正月四日

一 白馬節会 正月七日也、仁明天皇御宇承和元年に始、馬ハ陽獣也、年の始に青馬を御覧せらるれハ年中の邪気をのぞくと云也、又青馬ハ春なる也

一 竹橋川神 正月七日也、吉凶勝負の宮の祭也

一 七種の事 不及注也

一 最勝会 正月八日也、聖武天皇天平元年に始ル、於大極殿最勝王経を講せられて国家を祈也

一 女叙位 同八日也、持統天皇御宇ニ始ル、女の位階を叙せらるゝ事也

白橡 紅梅橡 緑橡 倫子橡 蘇芳橡 黄橡 紫菀橡 麹塵 葡萄色 赤色 橡染 紫分 鶯色 鶯袖

一 県召除目 正月十一日也、景行天皇御宇武国司より始る、諸国の官人を司也

一 常陸帯 正月十一日也、かしまの神事也

一 踏謌節會（タフカノセチヱ） 正月十六日 但男たうかハ十四日也
天武天王の時始り 連歌の様 うたひまひけり 京
中乃男女此声よききものをえらひ舞せしむ
なり 哀れふかし
一 御薪（ミカマキ） 同十五日 是も天武天皇より始る 百官士
とし〳〵薪を奉る
一 さきちやう 同十八日 禁中此外八十本日々
一 賭弓（ノリユミ） 同十八日 清涼殿天皇より始る 天上此賭弓
とて臨時の射礼の日なり よめかわりあるゆへ射とらする
一 御忌（ギヨキ） 正月十九日より廿五日迄也 知恩院又黒谷百万遍
にて行ふ

一 冥途乃餞説 正月廿日
一 七瀬乃祓（ナナセノハラヒ） 日毎の後冷泉院の御時始 雪汁いてくる

中春

一 二月堂行（シユニイ） 奈良の都にあり 二月一日より十四日を
かり水とて若狭より来るといひて祈れハ若狭ハ水もなく
二月井戸より必水わき出るせその水をとり足を
すりれを押く
一 二日やいと 二月二日にあたる八日十五日にもすへし 彼是ハ
灸なりし八日とをやいとする也 来るかたも
さわ川柳 川柳 姫小柳 中柳 ○○柳

志たり柳 ねこ柳 [illegible]柳 めかり柳 青柳 柳さく
柳か柳 柳腰 柳ふ鞠のけ

一春日祭 二月上ノ申ノ日也 仁明天皇清和天皇両度行しせ口伝有之 此事ハ建立出し伝れた御代をも根元をまつ志めんためなり

一率川祭(イサカワ) 同十四酉の日也 養老年中始ん

一園并韓神祭 二月上ノ酉ノ日也 桓武天皇延暦年中に始ん

一大原野祭 同上ノ卯ノ日也 文 天皇仁寿元年と始ん

一祈年祭 二月四日也 天武天皇四年に始ん

一初午 二月上ノ午日也 稲荷へ詣也

一薪の能 同七日より十二日まで也

一遺教経(ユイキヤウ) 二月九日より十五日まで 小児るんまたく
みそ行く

一時宗躍念仏 二月彼岸之八月の彼岸にも在之
是又ハしめを用らく

一ひん桜 ふきのたう 麻まく 菜ノ雀(スゝメ) 流そく
くちなハ いご 青鞨 初午 まめに さと粳 [illegible]
つき米 かくも流く 田地り わか 煤男(アラ)
あまれり 田かしもみまく 孫りん 二月十五日也

一志やくたらひ 二月十六日 座頭中行也
かへるこ そんをく 上羽蝶 あめ 曲ろ なぎ 雲ゐかれ
小国に在之

はなの姫庭鷹(ツメカ)春なる小たかく、こゝろ［虫損］とて云かゝる狩 けふの絵尾

白尾 鈴(スズ)子等 守護人為楽春の鷹の狗連ぬ

小出仲ゟ八田君へ

末春

一 御灯 三月三日く 一条院御宇始ル

一 曲水宴(エン) 同日く 村上天皇御宇康保(カウホウ)の比始ん

一 菊綾禁中にてくらし事 三月三日く

桃の盃 草餅 祝 ひなあそひ 鶏合 堺(サカイ)のきぬい

行也三月三日ゟり よもぎ摘(ツミ) よもき菊 あふちき たんぽゝ

一 あさつき 日杉など そたち。三葉ふせり すまふ草

うつほ草 をくめ とこなつ。くさ井 さくの根なり

けしの花 仏の座 うど ぜんまい つくし いたどり

菊の年 のぢしゃ 罌粟あざみ まめ例比 めんてたいえ つた風

ふき孫の花 大根 そらし

一 石清水臨時の祭 三月中ノ午日く 南祭とも云 村上天皇

御宇天暦五年に始る

一 須ニノ十日祓 三月上ノ巳日く

一 鎮花(ハナシヅメ)祭 花の咲比疫(ヤク)神分散しても人を悩す

・事行ひこれをしづめんため

一 千本念仏 桜咲を待て行く

一 壬生(ミブノ)念仏 三月十四日ゟ廿四日まで

一 嵯峨大念仏　三月五日ゟ十五日迄

塩竈桜　虎の尾桜　うば桜　ひ桜　犬桜　ゆげんさくら

薮桜　こめ桜　墨染桜　楊貴桜　西行桜　熊谷桜

きりやつ桜　桜根 矢の根ニアリ　桜のり　桜鯛　桜

桜いかだ　桜いを　桜まく　小桜おどし　桜さう○

桜冬　桜をのゝ　花びら 清水の貝ニ有 又正月の餅のうちニも有り

あだ花　餅花　花たて　花入　花かご　花あけ

花筒　花莚　花あかり　花ぬかに　花のかゝし

花見車　花うつぼ　錦の花　火花を散ス　花ゑ蕪

花嫁ぐ　花の志ん　花鳥　花舞ゑ　花曇日

香花　花女　花見さかり　花ふゞき　寺

花つみ 天智天皇ノ事なり　菜花の花　目かくし花

花さゝいたし　野んこの花　みんなの花　あけ

すみれ花　やまぶき花　ふじみ花　まんれんげ

まちつし　よせつき椿 当世ハ六月土用ニ 徒ノ保方ニ候ひ八　春の内へ　たとへば

酒とめて　たゞみ　重陽の宴より　当ハ行なれ

和とかくも　当世ハ四季ともにえ子ろく　羅也つ

大志ても　伊勢椿　ちり椿　うす色椿　姫白椿

花入椿　けふ当世花と一緒椿を　数をそう　咲ゟ

祇く流布せらるゝをは　出ス花

てまりの花　小米の花　さくみの花　桜草花 こやうなこびん

百花　宇治の初　摘　き茶　新茶とも

一 さいかし あひ嫁 うかれ猫 ひよくろ 雛子 上海なく日
さくめ子 ひばり 雛 藁山へ入 山の志ぎ わかれさい
一 麦うづら ひばり 子ひばり つかふ 仲しも霜月 事かり
むかくろ 苗代 田どころ 稲草
一 壬生の花 三月十日く 今宮之 賀茂の里分祭く
一 東寺の氣供 三月廿一日く
一 東大寺授戒 孝謙天皇治世に始
こすき牛 萱され 此生死 麻のみくに いも種 うつる

初夏

一 綿かき 四月一日く 牡丹 芍薬 ふうつ木

川卯木 ちやきみん むいく ちやきい 杜若 祭はあく
いちもつ 口なし のさか 桐の花
茄子の花を結ひてハ冬く ちやきは春なり
卯の木の花 むかしの花 ぬりかさ 雲の星
一 大神祭 四月上ノ卯日く 三輪れ社く
清和天皇貞観の比よりと始るく
一 稲荷ノ祭 同日く
一 山科の祭 四月上ノ巳日く 元明天皇和同年中に始ル
一 平野祭 同上ノ申日く 寛平十年ニ始ル
始仁徳天皇御祝奉れく 請和天皇貞観年中に
一 松尾祭 同日く 同所宇小始

一 杜本祭（モリモト） 同日也 河内国にあり
一 當麻祭 四月上ノ申日也 大和国也
一 當宗祭（マサムネ） 同上ノ酉日也 宇多法皇御宇ニ始
一 梅の宮祭 同日也 仁明天皇承和三年ニ始 是
定之ゟとゆふて大后の宮より始る 橘氏の氏神也
一 竜田祭 四月四日也 天武天皇より始 大和国也 水と
風の難を祈る神也
一 広瀬祭 同日也 右両所何も同
一 擬階祭 四月七日也
一 灌仏（クワンブツ） 四月八日也 夏に入日也
一 嵯峨の御釈迦開帳 同日也

一 伊勢神衣（カンミソ） 四月十四日也
一 山王祭 四月中申日也 後冷泉院御宇長久
四年ニ始
一 賀茂祭 四月中酉日也 神山祭也 欽明天皇
御宇ニ始れ
一 多賀祭 四月上ノ午日也 江州犬上郡也
一 白河院後 四月中ノ申日也 圓融院（エンユウ）御宇天禄二年ニ始
一 中山祭 同日也 後冷泉院五年始
一 吉田祭 四月中子日也 一条院寛和元年ニ始れ也
一 くらへ競馬（バシリ）入門もとをあるなり 此か院寺にもとる
為也
誰首詣（ミユケ） たゝるもとくるなり

一 蚊帳 つり初 四月後卯日く

一 土塔会（ドトウエ） 佛国天王寺に行ふ

一 ・韵幸（ビキ） 四月六日之二条院にて承暦元年ニ始

一 三枝祭（サイクサ） 元正天皇養老年中ニ始

一 世
早麦刈（ワセ） 木綿蒔ニ あ残らし たねまき むぎこき

一 ほとゝぎす けれ鳴て頃を ときとてすゝ京へ帰り夜ゐ啼なく
（生するとぞり）

中夏

一 献菖蒲（タテマツルアヤメ） 五月三日く天平十九年ニ始ん

一 五日節會 推古天皇の御宇より始

一 端午節 左近右近 競馬 騎射

一 あやめふく 菖蒲をひく日 いんぢ打 その外

一 ちまき 百草を まるかいまるひ（ちとつる）

一 きそひ舟 めうこしにハ五月五日ニせりえんする

一 かぶとのけいそ 五月五日く

一 深草祭 同日く

麦秋 麦かり まくさかる 又たい 色々の花

松梅の花 栗の花 ちんたんの花 薬ちる ひめゆり

見百合 さゝゆり

一 ・さ家祭 今ノ家祭 五月九日く

さみだれ さ月雨と ほりうす すいろう （思ふべし 今ノ新花見）

五月 あんず ぐミ あからさく 麦わら

一 竹子

桑の実ほうかごとも云 白瓜 あさ瓜 木瓜 ひめ瓜
茄子 さゝげ あをさ なすび 田うゑ 足もとかくる ころのこと云
けふ水無の子何も皆七組の菓 霊房の菓雑く
うかひ夜ふくる川よりさいこ泉中は夜川の祭

一 室明神祭 五月十三日く 横なくに在り

一 有云[アリナヲ] は廿五日く 村上天皇治定と始

一 宮勝講 長保四年に始

一 着鈦政[キヤクタノミイト] 元明天皇治定 和同の比始ん
のこさい 大宝よりの 雲ひく前 二あ まひ は比まりこ 何も皆けれ

小麦刈

季夏

一 醴酒[ヒトヨサケ] 六月一日く 應神天皇治定始こ 行く鎮祭 はりく 氷室の例に紀

一 延暦寺六月會 は四日く 桓武天皇治定 延暦年中と始 ひえの山に行く 鞍馬竹切 六月廿日の祭く

一 月次祭 は十一日 弘仁年中に始

一 祇園會 六月十四日 貞観十一年比より始 下京の祭 すりは七日にほこしを 鉾かし出る人こたる山ふこ ふと隠れて

一 函谷ふこ 長刀ふこ 放家ふこ 鶏ふこ 月ふこ

一 菊水ふこ 舟ふこ けふはまたふこの名も行く

一 對馬祭 は十五日く 試楽八十五日の 鹿く尾張國に在て

一 勝田祭 は十四日く 尾張に有る

一 住吉祭れんけ有江戸へ
一 安藝国ハ諸祭 六月十日より
一 伊勢祭例 六月十六日之翌十七日ゟ毎日ハ出家も
ゆかんめて謡く
一 喜定食 廿六日 十六ヶ所ニ 餅を備 獨(ニゴリ)酒を付る事有り
一 志度寺ノ祭 六月十七日ニ 讃州ニあり
一 富士詣 六月中也
浴衣汗かく 汗巾 白袋 引しハ 切麦 麦粉
ちく竹わかれ 行水 紙のほし 吹流し
さらし布 あさ布 しらふん こちよ 麦葉
ちゝみ布 東布 木綿布 夕すゞみ ひるさこ

百日紅 ひあふの柳 夏切の茶 南天花 麻門
立そ 麦そうめし なすの花 吹かき 伏かき
梨たり ひし 仙翁花 石竹 がんひ かうせん花
うちわ ゆかせんろう てつせん花 風車花
きんさし ところてん ぎやうし 毛せん 麦のしこ菜花
つゆす萩 まんまるさけ 霍乱(カクラン) 香需散(カウジユサン) こちこ
山椒のり 麦そ橋 赤とんほう 稲りんとう
羽ぬけ鳥 すゝし 六月九日ハ庭中に行水 菜露つふ
一 橋立祭 六月十八日 丹後国也
一 道明の祭 六月晦日なり 水あひあり
一 住吉おはらひ 晦日也 水あひあり

一 大祓（ヌサ） 同かく 天武天皇より始る

初秋

一 せたい 七月一日より心さし物を祈る之 古続録 同前にく
いきこた后 昭和の花 こゝそとき むしけ
一 萩の戸 萩をうへられたる花なり 清涼殿小
れ二間の前とある

一 山伏峯入 七月七日 当山醍醐の三宝院定文 八月
一 七日松山峯入 吉野より入る山伏
一 乞巧奠（キカウテン） 七夕に琴をそなへ白露かく
一 文殊會 七月八日 仁明天皇承和に始る

一 清水寺千日詣 七月九日夜より十日朝まてく
一 盂蘭盆（ウラボン） 七月十四日 天平五年に始る
なすの飯 同さし鯖 ところてん 茶せられのたまさ
聖霊まつり をかみ大 そん帷子 曜をとる 迎や出る
別ハ聖霊の霊を火に焼て 送りけふてたるとそや
よ
聖霊かりたしやきたつとかせしと申出しとて
りたつとゝやとる 開解（カイゲ） 七月十六日 夫志一日 同十七日
かく
焼香 おそつき
一 仁王會 天平七年 七月に始ん
一 相撲（スマヒ） 七月二十六日 同年同月に始ん
一 ふさ山祭 七月廿七日く 信濃諏訪く

なでしこ草一名人草　桔梗　鶏頭花咲初
中秋
一八朔風俗　建長の比より始ん
あめの魚　八月一日分江戸に出初之
稲刈　こせ毎より　いなご　稲の刈　穂みとする
そばの花　敦賀祭　八月十日馬市を　青梨お出し　いも名月　八月十五夜分
一石清水放生会　八月十五夜分り
一ひのたく　又さそくれい　同四日　右二つの祭は山崎より行之　放生会は勢する祭之事
一宇佐宮祭　同十五日　豊前　豊前国之
一箱崎祭　筑前国之　ともに行く
一鶴の祭　同日之　能登国羽咋の郷の祭之

一信濃国駒牽（コマヒキ）　八月十五日之
一甲斐国駒牽　同十七日之
一こまむかへ祭　八月十五日之上京に行く
一武蔵駒牽　八月廿三日之
一上野駒牽　同日之
初じん　志てめき　志て笛　よこ川　鷹山切　鶉初
鶉新　若たか　尾越のも　あみ鷹　同生し
巣たか　何もわたり　ホ秋あり　をつてあみ　うづらやき　同鮎
鮭　草をあく　けし　初ヒ　はた八月之　そらり川
かじしホ　何も山田のも　何もホすり　うん秋之　ゑのころ
もめぬ　栗　ゑのころ　椋　梨のみ　白や　さくろ

あをなし なつめ 志井 ぎんなん もくし ぬかご
かいつ栗 あけび ひよ鳥上戸 むかご かき 烏瓜
種なく 茗荷の子 松たけ 志めたけ きつたけ いくち
志めぢ 初たけ ほし せうろ 猪たけ 芝茸
ねずみたけ 篠茸 天狗たけ 紅たけ かうたけ

末秋

一 秋の衣く 九月一日く
一 御灯 同三日く
一 不堪田奏（フカンデンソウ） 九月七日く
一 重陽宴 同九日く 菊の盃 菊綿 太白の菊

さびあゆ 奴れ鷺 紅葉 ちりこゝ こゝめぬき
らんきく 程々菊 小車 野菊 菊の異名
落草 かるかや草 南かり草 すゝめ草 霜庭草
秋まへの花
はかなきもてはしあまりあくの云ふ小八菊と云字を除くし
一 今宮祭 九月九日くこがねの葵と云 桓武天皇御宇
より始れ 伏見の里にあり
一 醍醐祭 九月九日く
一 いく玉の祭 同日く 大坂にあり
一 伊勢奉幣 九月十一日く 崇仁天皇御宇より始れ
思ひ草 わすれ草と云 一 諸家の和歌 大夏名月

九月十三日 橙柑 金柑 柚 橘のこ 雲州橘
久年母 佛手柑 西の川ならし門 新酒作り
初鮭 初冬ゝ
一神おくり 十月一日 いろりびらき
一亥の子の餅 同上ノ亥日 永安四年ニ始ル
大根引 いも引 山のいも引 菜引 そば刈
一麦蒔 ん蒔
一荒神ノ月中ノ亥日 但十月中ハ宗ク
一射備始 十月廿日 御家宴同日

一真如堂 十夜 十月五日より十五日まで
一興福寺法花会 十月十六日 常楽殿ニ有り
一維摩会 十月十日 於興福寺行ク
ト元明天皇御宇和銅七年ニ始行ク
一金比羅(コンピラ)祭 讃岐国ニ有 小児小石ヲ以テ作ル祭ク
一法花八講 十月十三日
一達磨忌 十月五日 五山ニ而行ク
つゝこ紀ろ つゝ紅葉 こがれ [illegible] 寒すみ紀 (夜ふし)
口切の茶 鷹司の鷹 山眠る 田物もおさむ
こも縄をときゝ かもだら さむさの集 山茶花
水仙花 枇杷の花 冬咲椿 初たら 氷魚しむ

亥猪 おゐこ このこと もらこ 綿ぬき 着さゝむ
ぬりかけ 布子 なちしらうすひく雪 大摘 なんか
納豆汁 さく里 なつべ 尼かおこ 節つき
けミりなかしも冬うとうるものかり
こそれ酒 あられ餅 雪餅 綿取し 綿子
香合ふこう 当國ふ八十月のれ分赤のめうりとミすれて色く
久り花 小春ふ八何花も咲すなり
神むく 十月晦日

中冬

一 暦ノ奏（コヨミノソウ） 十一月一日也 欽明天皇の御宇ニ始
一 朔旦冬至 日なし 神亀二年ニ始ん

一 相嘗祭（アイムベノ） 十一月上ノ卯日也
一 五節 十一月中ノ丑ノ日也
一 鎮魂祭（タマシヅメノ） 十一月ノ寅ノ日也
一 新嘗會（ニイナメ） 十一月中ノ卯日也
一 豊明節會（トヨノアカリ） 同中ノ辰日也 大嘗會御禊ニ在之
是ハ禁中ニ於テ行ハ事ハ委ハ記しかたき也
一 小祭 十一月中ノ酉日也 賀茂臨時ノ祭也 寛平ニ此時ニ始之
一 小忌衣 同しころの袖 山あゐの袖 何レ白キ也 五節の
舞人の着する也 又賀茂祭又大嘗會の時着ん也
一 星神楽 禁中の御ハ庭 星神楽也 かくらうたのいめ
ゆふ袖 奏うする 明星（アカボシ） えりしす つつかなん

超清のゝすけ 付渡らふ けふハ之催馬楽(サイバラ)
のうらひぬハ雜也
らくあそび 雪やけ 雪つぶて 雪まろげ
ゐまき そり 雪踏(サホ) 何れも北国ニ在て 雪さ
ゐのゝ竹ニ一丈二丈のすとききとき 並て 冬と
の雪のかきあらためするを 僕り
雪ころがし すゝみ 雪打あい
一 子祭 十一月上子日也 夜する也
吹子(フイゴ)祭 十一月八日也 かぢや方ニ行也
一 冬夜 此あさき 遊ぶ物 雪すき 雪つき
雪おこし 山の雪 かざき たかれ 北ハ北国ニ有る也

一 春日松下御祭 十一月十七日也
一 貴布祢まつり 十一月十四日也
・ 末冬也
てこ乃節句 ・世話ニ云り
一 内侍所神楽 十二月十一日也
一 荷前(ノサキ)使 内のさきの名 十二月十二日也
是ハ小先帝(テイ)御陵(ミサヾキ)へ幣帛(ヘイハク)を奉る也
一 仏名 十二月十九日より三日の間也
一 奉牛童子像 大宮を白也
是ハあらし 一 晦日の御はらひ せきぞろ すゝき

如月の初つき　まち花待るかね　年まこ術
門松むかふ　節分　是ハそと福ハ内と云る身
是中ハ　のやらふ　鬼を追まて志き豆・まめ打
いりまめころ　役をらい　是皆節分の夜之
一 追儺（ツイナ）節会　節分の夜桃の弓葦の矢にて邪鬼を
はらふ有
一 めいの神事　大晦日夜之　長門也く
一 氷宮（サクラウ）絵馬　同大晦日之　伊勢也之
一 節折（ヨヲリ）　同大晦日之よみの会婦（ユヤラフ）云　女天子これをはひ
一 此事なり　神代より始る
懸想詞

女よめ入　聟入　夫婦　めうと　両おとこ　かゝを
つわり　懐妊（クワイニン）　こいやみ　くどきみ　あくされ（アクク）
まゆ結る　腰をとる　目せうけ　目てまわる
そい添　二人添　夜なく　添ぬ網てまんきされ
いとめの中　ひよくの中　わんての契　忍い入　色人
わさゝし　うゆち　恋しき　あいされ　やすし
みめよし　身もち　出しびん　つかのまき　て枕
脚布とく　夜ふし　あらわの身　枕かし　素女論（リヨヲロ）　女会
さゝやき文　流の枕香　男きらひ　好色　二人いさかひ
めいらひ　あぢの口まで　志ふせうり　こらして
かりころ　あらかときつ　口細にさす　紙紅　添み

世話 内裏 第のあそひ 御ち上﨟 老女房
若女房 こしにまとふ 思ひ染す 得ちよ
三つ重の衣 住かり也し 皆老固定 侍きわし
得給に孫着を治す 藤壺柳丸 一ちかいらん
おあひ屋 得白祭に深とつくく 万代分也
けいせい 遊女 白拍子 めし寄 仙女 禰宜
池田の宿のゆや まろうとせ けいせいも遊女く
取たて 是あへし 但当世のきぬせいかりのいひ
ならす 何事 ちもと 御前 ぬめりの
みめよなる 得めかひ 柳にやれ ねこぶなかりと云
付ハつりそめにもあすへうす是ハたく下の下の詞

つまめの〻中作て 御んけしきされつゝしハ去色
かもぬ 何かりめせのさくひを能に心に
うへくたりしかりへし
一 后宮女代は名恋にかゝり作れんてと 帝 昌琢法
眼に是をとくハ蓑て村にまりくなと云一字て
恋にかゝり作れハまりて 君寵心への女房
いかにハ及あ守恋つて入くしと中作れ以うまゝかと
書記し作り組を任る時代の事ハ次第
ふ有
一 二条后 業平と密(みつ)通の事世にかくれなう
りかハ恋の字にかゝりまし作り

一 秋宮　是ハ清和天皇の時文徳天皇の御むすめ
これたかのみこと申 業平将の使として伊勢
へおはせし時神のいがきをこえて業平に契り給
ひしゆへ伊勢物語に伊勢氏ハ秋好腹とて今に伝ふ
ハ斎宮とし
高階(タカシナ) 山本(?)縄子 師尚(モロナオ) 実者業平(ナリヒラ)の子と云
一 藤壺の中宮 かゝやく日の御子と申なり
より先帝源氏の御心をよせて冷泉院を生給ひとか
又ハ薄雲(ウスクモ)の女院と申なり
一 六条御息所 物ねたみふかくしてあさひ
のよるひるのうへとも物の気となりてとりころし
給へハなさけなき事にや侍るとて
女三宮 源氏の宮をとられて柏木の右衛門督に
密通ありて薫大将をば生給へり
一 朧月夜の内侍のかみ 花の宴の夜月夜に
ゆきてんのうへをみて契りにし源氏の君
小野(?)に移り給ひてたえの御心たえやられ
一 玉鬘の内侍の君 源氏の君にひかれて藤ののうへ
孫し給ふとて髭黒の右大将の北の方となり給ふ
たれ人の心につくしかし 〜人く
一 浮舟の君 薫大将の妻となりて後の宮にいよ
く思ひ〜給ひて自害〜宇治あり

でゝ松のるも行ゝ少年にてはまずの恩ともなり

一 木枯(コガラシ)の女 左の馬頭か時かよひける女なり 神無月

のころほひ月おもしろかりし夜うちよりまかで侍

るにある上人きあひて此車にあひのりて侍れは

よひ人待らん宿なんあやしく心くるしきとて女

の家はよきぬ道なりけれは門に車をとめておりぬ

荒くいたくさびれたる門ちかきはらはすのこに

ゐふにさしつけてと月とえんなるところなりける笛を

取出て吹ならしかけもよしなとうたふに和琴

すかゝきのよくあるとうちふきてくやしめきたり

ねよき人のよみける

琴の音も月もえならぬ宿なから

つれなき人を引やとめけるとあなれは

これは男の内より女

木からしに吹あはすめる笛の音を

ひきとゝむへきことの葉そなき

となまめきかはすいとあやしきありさまなりけり

一 源内侍は年たけ侍る女なりしかあまためでてもたり

しなられめりさよく琴も上手めかし侍れ

ハいそちにあまりたる女にて侍れと光源氏も心まよひて

契り給ひしとそ

此外源氏一部又狭衣物語に書侍る女此なす

つれなかりしをうらみ給ひし紀有常が娘に
業平小町がたぐひこれなかりし その後より后女御
更衣女御の君懸想ふみ給ひしをば 此はさてあり
折しも和合ふみさるべし
光源氏の君 御装は大将中将と聞え 初ふし
扨八百つまさにこもり給へるに仁和寺の威徳殿（イキホヒ）
めのと心を合て妬みをりしに大将殿二条后
みそかに語てともに語らふに 其とは車に取
きそてふけたるを御覧して仰せて行く名
余所語とらせんとの給ひ 二条后御門に嫁
色へとなりしん

そのまゝ語り給ひ御懐妊（クワイニン）有りしとぞ
一 小督局（ツボネ） 高倉院の寵女人誰も志深き御なさけ
これは此に及ばず
一 三条の宰相新たびたび心をつくし給ひし事十五年
此ふ姫恋みつへし
一 匂当内侍 新田義貞の妻也 是も太平記に委し
一 妹喜（バツキ） 夏桀王乃后也 酒にゑひくるへとて 若き
けるゆゑに 桀王てうあひのあまり 酒の池に
て 堤をつくらせ その中に酒をたくへて 三千人あつ
めて 欲をあいづに一ふして 一度にかくさとうき
かけて此をとめぐる一度に呑せて 興とし給ひて 政と

がうくり諸人ハ天下にうらみられけりぬ

一妲己殷紂王の后也炮烙の刑とて罪ある者
を炭の火をおこしてその上に銅の柱を渡して罪
人を渡らせ落て焼死するを見て悦びて紂
王は妲己にまよひて世を失ひけり

一褒姒周幽王の后也烽火の笑とて烽を挙
るを好みて笑ふ烽火は兵を集むる時の相図也
褒姒わらふを見んため兵なき時も烽火をあげ
ける故に兵集まらず犬戎より幽王を攻ける
時兵集まらずして終に亡びにけり

一戚夫人漢の高祖の后也寵愛して諸
其夫人の腹の二の太子へ位を譲らんと思ひ給
ぬれ一の后呂太后大きにうらみ給ひ依て張
良をたのまれけれバいかゞ仕らんよきやうにを
ろかやとめてすゝめしかバ張良申ていはく
商山とて山に東園公綺里季夏黄公角
里先生とて四人の隠者有けり高祖是をめ
せども来りすめしけ四皓を一の太子に付参
らハ如何そおぼしめし給とす事も侍らん
と申給呂后此を覚まして四皓を召
て太子に付申されけれバ是にまかせて天下を
呂后の太子へ御渡り給ひしとぞ

一王昭君 漢の元帝の官女なり毛延寿(もうえんじゆ)といふ畫工(ぐわこう)とかほかたちを悪しくかきたれは胡国の
賤につかはさるへきにて門をいでんとするにいやしめて猿(さる)
行のおこそみ小絃管(くわんげん)の役者をそへて送らせ
給ふにせん〳〵ハ馬上にて琵琶(びわ)をたんしけれハ
けるゆへハあはれなる人のなみたをもよほしけれ給ふ
さとすしみふりかくめくとし

一虞美人(ぐびじん) 楚項羽(かうう)の后也烏江と云所にて項
羽ともにうたれ給ふ其後の
墓より生出る草を虞美人草と云り

一李夫人(りふじん) 漢の武帝の后也かくれ給ふのち
まし〳〵し故に李少翁召されてうかゝふへく
傾城(ケイセイ)傾国(ケイコク)と云事は李夫人より始れり李
夫人死し給ての後武帝なけかせ給ひけるにた〳〵返
魂香(はんこんかう)と焼き夫人の魂をあらはさせ給ひ

一班女(はんじよ) 漢王の官女也怨歌行(ゑんかかう)を作りて我
身を扇にたとへりとなむ思ひけるくちて君
みてのあはれみにあつかしめし時ハ君に扇の如
とさしはさまるゝ衰老にもなさしめ捨らるへ給ひ
たゝあいらるゝしかり作れハ漢国に捨られて秋
のあわりに作りてハ扇を箱の中に捨て用なきと
しゝと身をとらへて帰りなむとなく

一西施　越王句践か后く越王呉王ニ戦まけ
てかうさんし作り时ニ范蠡け西施を呉国へ
おくり作ル呉王又是ニまよひて会稽山の
軍の时後ニ越王ニうたれ作しぬ越王范蠡ハ
けろ口を言をのみてすゝき二言会稽の恥
をたすくとぞ

一楊貴妃　唐の玄宗ニの后なり此事ハ好色
長恨歌ニ作れハ委細ここニ及ハず　長恨歌ハ古文前集ニ有之

一昭陽人是も玄宗の后く楊貴妃ニそねまれ
作て後ニ玄宗ニも不嫁して上陽宮ニとし
こめられて一人深窓ニ年をとるや

一蘇着蘭　晋ノ竇滔か妻なりとうじん追放
へ行て久しく帰らすしかハ恨ミにたへて回文
錦字の詩を作り錦の紋ニ織て送りし女く

一楊枝　白楽天か妻く楽天年老て病ニとこ
されしけハ女を他へ送らんとおもへハ女別哉
おしみて血の涙をながしてかけき作るとぞ

一王朝雲　東坡か妻なりとこハ海南へ謫せられ
しけハ女も志てひて行海南ニて朝雲死し
けハ東坡かなしミて詩を作りけるとぞ

一黎倩　宗胡铨か妻ハ唐秦檜か
悪り
高宗の妻の事を作きと作りて秦檜か

きりんと云所也天子へ捧まゐらするふまゝて海棠へ十
年を隠せしける女も無て行く所に至人きりて何
湘潭ふして酒をのむけ女笑て人ふ云ふ和のはる
をみて梨花に露の有を見して詩を作し女人
のうつくしき若花ふ忍ぶ羨しき

一 董賢(トウケン) 漢哀帝の宮仕へしく董賢いまた若
年の時法門にてあひ床つらす夜の物しふめされ
夜ハ夜をもつたしと疑しせ帝のおり法門つとに起
出んとし給ひしふ董賢か衣の御袖を臥敷て
いきたるへかしとう愛敷させられけるをいとひ給ひて
御敷ふて其御袂(タモト)をたち捨給ふ門ハ故きゝ足ふて出法有

のうとくふうつき此心をくと董賢おとかしく見て
後いとしとうしう断袖と云哀帝の寵法の法时
法なとんふむつい断袖を切黄ハ泉の此帝の供ふ
しまゐらするとそ

一 李季節推 東坡かふうく心残そめし花咲く有
峰季節推風水洞と云亭に行て東坡を待
待ち渓橋の水より梅花たちうつり流るを
東坡あやしくおもひ梅を見てい嗣行て待心
を詩ふ作れり

一 渓橋暁溜浮梅(りう)苦笑
一 知 春繋馬岩花落

好色の男女

一 業平　さてハ女あるかきり見る男とて云り
色このみの記まなし
一 源の物語　かゝる下の色好（こり）し人と伊勢物語に語り
いふる源氏あまりなきかのを物語れハそれをさし
てや作りし人て
一 柏木右衛門のかみ　流罪（しこ）の袖口より女三宮をうかゝひ見
て身をこかし急死せしとそ
一 白（？）兼卿　右の中将の生得（むまれつき）に君の白かるを
うらやましくや柏木の宮へつかはしになれとのそきたりしめ
てきこえし縁へハ白ふるやとともや深き母の君に
心をうつして宇治の里にかよひし人なり
一 深草の四位の少将　小町に百夜通ひし人とそ
一 志賀寺の上人　年老て後京極のみやす所に
逢ひて恋をしたまひて出家の心を破り
給ふとそ
一 摂津国に行く面なること云けり　又和泉国に
ちぬ男とならん云者ありけるにあしやの里に
うなひ女と云女によりてたかひに争ひ出ん
とある其女の歎のいちしるしとて死しとも
さして命もうしなひの生田川にうきたりて水の
をい縁へあらんをとふあるよ世作る人とも紛是とね

行ふちの翁に二人の実うらと尻おかれけり
むせんなるなくて此川ふかきとなりけれ[illegible]二人の男
もつらひて身をなけぬ此紀の国の[illegible]るの死にハ
と[illegible]よそ一所に相さめぬ里とめ塚是なり
一 竹とり此物語ハ小書(かき)もある好色の男な人の名此
る事一人ハいしつくりの皇子一人ハくらもちの皇子一人
ハ右大臣あへのみうし一人ハ大納言大伴のみゆき
と云人ハ中納言いそのかみ[illegible]まろなりけるに竹とり
の翁か生し立し女を姫ハ心とくて乳母とを
やつして此事翁の[illegible]となようし身をかな
いて望みを言ふ[illegible]に作りけれ[illegible]得へ作りといふを

文ふいくへとたふせてつれなし翁のいさく人の心
を試るハつらき[illegible]す人にまさて あひ給ひて人せさると
姫ハ翁のわかせしをいなひをそんもおつる家
きる[illegible]をもてわたりけれはあまさね人へ(ふかきみ人)
ん事ハおそろしけれハ姫かのをんを竹へ給ふ人
人ふあつるんをも翁ようこひていそうしに給ける
一 右[illegible]ゆけれ此皇子ハ天竺釈迦如来の石鉢をとるに
そのをちをたつねてたへとそ石[illegible]りけれはすし打
すてつくしと思ひ[illegible]しきる[illegible]この男此備の
石の鉢ハそての[illegible]とめえた事[illegible]きし[illegible]たた
こ[illegible]とも思ひ大和国[illegible]市の郡[illegible]寺のひんつるの

ふつても行て東海の数千万里の風波をしのぎ
御行幸して此浦にまゐりけれとまゐる
なとてこそ姫の心にも御かけ一枚なれは
是ニハ満けてんやと思ひ給へ献ける玉の桜
作りしたくみとも此事ありけるをこそひかるかそ
備ハありけれ其後両国ニて廿へあらい
出て知けなりけるとそ

一 右大臣安部のみむらしけんにめしに有と
申し火鼠の皮衣をたくへと云けれとも諸ニあ
まれの人ニて唐へ（モロコシ）まゐりし云商と信して
和とし此金（コガネ）に代へてあつらへかく内船して約

茶ニ成りけるを持出して錦の袋ニ入姫の
前ニ差出し給ふ也姫是をとりて仏の御前へ
参りつゝやくと云是ハ参りもなく拝し給ひとそ
見し給れハ夢と共にうつゝれたるなりしハ
ありそひ給ふても居りて只なりぬ

一 そのかみ此浦宗ニハあらざりし此山ニ有と云玉此
桜をもとめてたくべしと云神国ニ立給ひ浦門へハ
諸所へ触べしといふ由を申 御使此里に出て
下知しましよ其物のたくミニ六人まて召
寄合（タルヘ）を以玉此桜と云物を作らせてや
をそれ猿しそ給ひ是をとりて姫の前ニまゐらす

かくや姫に乞はりける火鼠のかはぎぬと云ぬ物をみは
すてゝんなるはこそ焼てみるかはおそろしき
ぬ人火にくべて焼けぬぬかりと云さし八火に
焼■てみんとて火中にくべ焼れハめらめらと焼
てうせぬ是でもむかしくめかりけり

一 大納言大伴ノ御ゆき是ニハ龍の頸にありける
五色の玉をとりてたくべしと云是ハ安かる事
とハ思ひかゝる家にかへりに云けて助かりけるに
人民海にとれハめでたくたてまつる我家
流れてし、毋鯛せん云ふにあれまかせてと美しく
を借りけり悪風吹き出てたちてに
毋とくつくさんとし侍れハかんたりのいそき龍を
こゝろさんと思ひにけり龍神ハあるとはすらく
ぞ心をやめ給ひとの龍神へは備えて無事
たるまる事のなと云けれハさかし此取たて
命助かりしとてかへりにけり

一 中納言いそのかみまろたりハつはくらめ
もちたる子安の貝をとりてたべと云ふ是と
云侍らんとするき子に燕の巣の有けるにちし
をかけてのかりけ巣をさらしけるに貝ハ有て
燕の子うくそこをにぎりたれと取てとち
して落られハ大てゝ目にかゝりて息へ入ぬくある

はてさせ給ふ龍に水なくてきさきくるしみて
いきぬ膠乃骨をおれり行れハ我ゆかのせて我
身にくりくれおそけ事思しられハ尓
もつき寺なりにとり行もくかくや姫にハえ
あハそくなりなる事なく
一 術婆迦(ジユツハギヤ) 魚賣人(ウラ) 天竺の内裏衣にハ宮女
此后まても高くの行行れハ此うを賣男
后をかいまみて志つ心なくこひ焦てなりけ事
常きこしめし情ハ上下によらへうれ后に志ち
と歩みへ給へとなりたまふハ車の志ちに一夜
ひなけ此内にまちみへ給つ人とおもしハ九十九夜
まて逢ひ一夜とまたえて死しなりとくけ事
大和物語にハ稲舒のるりにさしたれ深草の
少将に
おもひきや志ちのはしかきかきつめて
百夜もおなしまろ寝せんとハ
一 三国のかたの[illegible]のこけあたしおかへく
世中此人ハ思ひをけ思ひ思つぬをハ思つぬに
此人ハ思つぬをも思つめともけるめみせぬ心く
花葉寺にひとし
一 小野頼風 女此男をうらみて放生川へ
身をなけれハ頼風もつひて身をなけ
ぬめり男塚女塚とて男山の[illegible]に有なり

此古事ハ古人の句の心とハ八雲に見えたり
るなり

一 桂海律師(けいかいりつし) 此人ハ延暦寺の沙門也三井
寺の児ニ執着の念ふかく恋こがれ
うきおもひをやつし人事の数多く侍れ
ハ書のこしつ秋の夜の長物かたりといふ
作りしを見給ふへし
太平年中より見えて此人の名前有かひ
これてハ何も恋ふかく侍るなり

[illegible]

右此一冊江戸にありて何某作者の望むによりて
さしあつめ侍りたるを書つき執筆君
今に至りて世式目ハ諸の作りぬこと人々
も知るハ乃我筆に記し侍るへきものと
なかなか愚意にまかせぬ事ならし只余(アヤ)
多き辞しやと人もいかひ尋ねて
書そむき事に知りぬ内も是非見
有人に物にあらす是ハたゝ田舎の人に
まうけ事にもなかれ作る

寛永十八暦
正月廿五日

帆亭
徳元

徳をハ行ふものゝ人ミや錦れ
道ハかこたられハつまでも元
はく神之へ

足斎

5年1月

①

徳をは行ふものゝ人をや鈍れ
道人ハおこゝろされハいつまでも元
ほく補之へ
足多